

中東アラブ研究センター

Middle East Centre for Arab Studies

地中海の東岸にのぞむレバノン共和国——その首都ベイルートから約20マイル、車で50分ほどの山の中にシムランという名の小さなマロニート派キリスト教徒の村がある。標高約800メートルに位置するこの村からはベイルートの全景と国際飛行場、紺碧というより藍色をした美しい地中海などが一望のもとに見渡せる。空気の澄んだ静かな山の村である。こうした閑静なところに Middle East Centre for Arab Studies (略称MECAS, 土地の人はマドラサ・インキリーズィーエと呼ぶ) がある。

I 沿革

その目的とするところは、日常使われることばと、図書・新聞・ラジオ・演説などに使われることばとが極端に異なり、かつ文法的に難解だといわれているアラビア語を短期間に、徹底的に、近ごろはやりのことばでいえば立体的に習得せしめる点にある。オーナーはいわずと知れたイギリス外務省。現在の Director は J・A・ウィルトン氏、一等書記官クラスの人である。以下 Deputy Director, Principal Instructor, Arab Advisor と12名の Arab Instructors, それに事務局3名がこのスタッフである。

PI というのはアラビア語研修の主任指導官のことであるが、これにはイギリス一流のアラビア語学者が就任する慣例になっているようで、現在のPIはケンブリッジ大学のライオンズ博士である。前任者の中には G. W. Thatcher, D. Cowan, J. Hopkins などの名が見られる。

Arab Advisor というのはいわば副主任格の指導官で、イギリス国籍をもつパレスチナ人がこれに当たっている。そのほか12名の Arab Instructors が実際の指導を行なっているが、そのほとんどがパレスチナ人である。中近東諸国において教師という職業は、たいていパレスチナ人かエジプト人によって占められていることをご存じの人もあろうかと思うが、ここもその1例といえようか。

予算規模がどのくらいかはつまびらかでないが、以上のスタッフをかかえ、かつ建物(土地の人が建てたものを借り上げるという形をとっている)——すなわち10有

余の教室と事務室, Common Room, 食堂, 講義室, 図書室, テープ・コーダー室, ピンポン・ホールと約30にのぼる各研修生用の個室と付属施設を管理し、単語カード, ノートから教材, テープ・コーダーあるいはトイレット・ペーパーまで(トイレット・ペーパーは Government Property と印刷されている)を入れると、相当な経費がかかるであろうことは想像にかたくない。そこであるとき Director にそのことを聞いたら、イギリス政府がまかなっているのは全体の経費の約3分の1で、あとはイギリス外務省職員以外の一般研修生からの月謝を当てているとの話であった。ちなみに1カ月の授業料は邦貨にして約7万円である。

II 種々の研修コース

さてこうした陣容のもとに種々のコースが設置されているわけだが、そのうち主なものは Long Course, 夏冬の Short Course および Advanced Course の3つである。ロング・コースは、これまでアラビア語のアの字も知らなかったものについての当センターにおける10カ月間の研修で、イギリス外務省の中級通訳官相当の実力を身につけさせることを目的にしており、現在はその18回目にあたる。ショート・コースは一応アラビア語の基礎知識をもっているものがはいるコースで期間は6カ月。修了時のレベルはロング・コースのそれと同様である。

アドヴァンスト・コースは上記のコースを80点以上の成績で卒業したものがはいるもので、修了時の実力は上級である。イギリス外務省の若いキャリア・ディプロマットの連中は(毎年4名ほどくる)、ロングおよびアドヴァンスト・コースの終了時に Civil Service Commission の公式試験を受ける義務があり、パス・マークは80点。上級試験に合格すると5年間毎年300スターリング・ポンドの特別手当がつく由で、いうなれば褒賞金目当てに懸命な勉強をさせようというのが外務省の魂胆であろう。今年のロング・コースの連中は中間テストの成績が一般にかんばしくないと Director に気合をかけられしゅんとしているところである。

以上のほか当センターには Durham Course, Special

Course, Ladies Course, Vacation Course, Background Course などがある。ダラム・コースはイギリス陸海空軍の中尉、大尉クラスの人々が習得するコースで、軍事用語などに重点がおかれている。スペシャル・コースは常設ではなく研修希望者の実力に応じて（通常は中級以上）適宜編成される。現在かくいう筆者がアメリカ人とともにシンジケートを組んで Advanced level の研修中である。このほか女房ぐるみ外交とでもいうべきものを目指してか、研修生の妻君連中に Colloquial (会話) を教授するコースがあり、レディーズ・コースがそれである。ヴァケーション・コースは大学生向けの夏休み講座で、英本国の各大学でアラビア語を専修している学生がヒッチ・ハイクなどしながらやってくる。

バックグラウンド・コースは中近東在住の各国在外公館職員、民間会社社員などに対して、中近東の政治・経済・文化・音楽などに関する基礎知識を植えつけんとするもので、バイルートのアメリカン大学その他の専門家を招いて夏冬の2回、5日間にわたって朝から晩までぶっとおしで行なう。アラブ料理を食べるのもその教科の1つである。

以上が各コースの概要だが、時折ロングおよびショート・コースのため教養講座が開かれ、専門家を講師に招いて中近東の政治・経済・社会など各分野の講義が行なわれる。

III 各員の日課

さてこうしたプログラムを毎年続行している当センターは、最初1945年にエルサレムに設立された。その後2年ほどしてパレスチナ分割。ためにアンマン郊外に1年ほど過ごしてから1948年に当シムラン村に移ってきたわけである。今の Director もここの卒業生の1人。こういう歴史をもつメカスは、もとよりイギリス外務省の外交官養成を目的に設立されたわけであるが、当センターの入所資格としては、イギリス、英連邦諸国ならびにその他友好諸国の政府職員および一般民間会社の職員などということになっている。したがって現在の研修生約35名の国籍も種々で、イギリス人のほかアメリカ、オランダ、南アフリカ、ガーナ、スイス、日本それにカストロ政権下のキューバからも外交官が1人来ている。年齢、職業もバラエティに富んでおり、18歳のこれからオックスフォードにはいるところだという若い人から、立派なヒゲをたくわえた退役海軍少将まで、外交官、先生、牧師あり、石油会社社員あるいは公認会計士ありで、皆ねじり鉢巻で頑張っている。多くは当所の個室に住んで

いるが、妻君同伴の人は村に部屋を借りて住んでいる。かれらの私経済はともにシムラン村財政の主要財源である。

つぎに当センターの日課だが、授業は毎週月曜日から金曜日まで毎日午前8時半から午後0時半まで5時限。教材は当所で特別に編さんされたものを使用するが、ロングおよびショート・コースでは初・中級文法、リーディングおよび単語リストの三位一体で現代用語の徹底的暗記を要求される。とくに単語リストについては各節ごとにテストを受けることを要求される。今年のロング・コースは少したるんでいるが、もし3月までに単語リストのテストを終了したら、中間テストでボーナース・マークをやるといってハッパをかけられている。

授業は午前中だが、こういうわけで午後も夜も単語に追いかかれ、宿題に悩まされる。これらをマメにやらないと一定の期間がすぎて、ボキャブラリーの不足がきわだってくるわけだ。これに会話の単語・文法が加わると皆フウフウいうことになる。中期以降は週末を狙って Essay の題が掲示され月曜日に提出。ということは週末がフイになる勘定。これらの時期をすぎると、新聞の講読、Unseen Translation (英→ア、ア→英)、Discussion (会話) などだんだん七面倒くさくなっていく。いずれも辞書を見るのは御法度。教材は教室にいるときだけ見せてくれ、こちらには保有できないから、単語がものになっていないと苦勞するわけである。新出の単語などはメモしておいてあとで暗記する。

Advanced level になるとこれらの内容が高度化し、教官も P I や A A に集中され、かつ耳の訓練が一段と強化される。たとえばテープから社説のごときものを聞き即座に口訳する。またリーディングなどアラビア語は、その読み方いかんでその文章を理解しているか否かが教師にすぐわかるので少し厄介である。このほか、毎週1回 Unseen Translation under Exam. Conditions というのがある。

各学期ごとに Language Break という名の休暇がある。しかしのんびりしていると怒られる。先日の掲示に曰く「Language Break を単なる休みだと思っている人があるが、これは休みではない。すべからくこの期間を利用してアラブ諸国を旅行しあるいはアラブ人家族のもとに滞在してアラブ世界に関するファースト・ハンドの知識を吸収し、かつアラビア語の実地研修を旨とすべきである」。よって休暇中は食堂も閉鎖。もそもそとどまっていられないようになっている。

以上の概略紹介で当センターの輪郭がつかめたかと思うが、とにかく現地語習得の重要性が強調されるおりから、1つの模範的語学研修機関であるといえよう。しからばこういうメカスについての中近東諸国の評判はどうかという、きわめて政治的な眼鏡でみられている向きがある。

昨年の春頃、メカス研修生の1人がソ連のスパイを働いていたことが判明しイギリス本国で裁判に付せられたジョージ・ブレイク事件に関連して、ベイルートのある新聞いわく。「メカスの学生は休暇中必ず旅行する。その際カメラを携行し観光写真をよそおっているの重要な写真をとってくる。そして帰着後アラブ人教師を除いた秘密会議が開かれ、これらのフィルムをうつしながら何やらを検討している云々……」。実にうまい筋書きで伝えたわけである。その頃カイロ放送でもシムランの学校はスパイ・スクールだという宣伝が行なわれていた。ところが実際にカメラの好きなのは日本人かアメリカ人ぐらいのもので、イギリス人は一般に旅行に出かけるときでもカメラは持ってゆかない。写真についてそれほど興味をもっていないし、大体カメラなど持たない連中が多いのである。ましてそんなたくい会議が開かれたことなどない。しかし問題はそうした報道記事をうのみに信じてしまう人がかなりいるだろうということである。ただしこの時は、レバノン国会における議員質問に対す

る外相答弁でスパイ学校閉鎖の際にケリがつけられたのである。そのほとぼりがさめたと思ったのもつかのま、1962年12月31日にレバノンにおいてクーデター事件が起こった。ところがこのクーデター失敗事件について、早速同日のカイロ放送は「今回の事件はシムランのスパイ学校による陰謀である」と伝え、またダマスカスやベイルートの一部の新聞(主としてアラビア語紙)なども「クーデター主謀者の事前打合わせ秘密会議がシムランにおいて開かれたという確実な証拠があり」、「現在そこに入りするものについて監視の目が向けられ」、「内務省に近い筋によれば政府は同校閉鎖問題の閣議決定を来週にもちこした」、「いやすでに同校は閉鎖された」などにぎやかに報道している。これらは根拠のない煽動記事であることはもとよりだが、少なくともそういう記事を単純に信用する人が少なくないことに注意を喚起すべきで、いふならば当センターがシムラン村に存続するか否かは中近東諸国の政治情勢の展開いかんにかかっていると考えられてよいだろう。

それでもなおシムランの夕日は今日も静かに地中海のなだに沈み、研修生たちはアラビア語の勉強に忙殺されている。

(アジア経済研究所海外派遣員 松村浩二郎)

—在レバノン—

アジア経済 第3巻第3号 目次 (3月15日)

研 究	低開発国開発問題への経済成長理論の適用性について.....	山 本 繁 純
調 査	東南アジアの諸言語.....	三 根 谷 徹
	わが国の対東南アジア企業提携の問題点.....	川 合 三 郎
資 料	後進国における低位雇用の問題.....	藤 井 将 弘
	リビヤ連合王国経済開発.....	西 野 照 太 郎
	FAO地中海開発計画国別報告書—イラク—.....	渡 部 哲 男
	インド道路開発20カ年計画.....	島 義 治
	インド農村における学校教育.....	篠 原 章
	東アフリカの共同市場.....	吉 田 昌 夫
時 事 解 説	インドの総選挙の結果.....	斎 藤 吉 史
	西イリアン問題をめぐる各国の微妙な立場.....	梶 谷 善 久
	フィリピン経済再建の諸問題.....	石 川 昌
	経済面からみた中ソの関係.....	関 憲 三 郎
	アルジェリア平和交渉とOASの問題.....	熊 田 亨
	韓国経済開発5カ年計画.....	西 村 敏 夫
講 演 要 旨	国際協力機構とわが国の東南アジア経済協力.....	堀 江 薫 雄